

薬の作用の強弱とステロイド外用剤について

先日、統合失調症患者の家族を対象とした家族会で薬物の作用の強弱についてお話ししました。抗精神病薬はもとより、気分調整剤や睡眠薬等の薬剤を服用されていると、「効いているんだかないんだか、どうだろう？」といった不安・疑問が沸いてくることは承知の事実です。

その会においては、抗精神病薬は一番最初に統合失調症に用いられたクロロプロマジンを指標に薬物の相対強度を考慮していることをお話ししました。

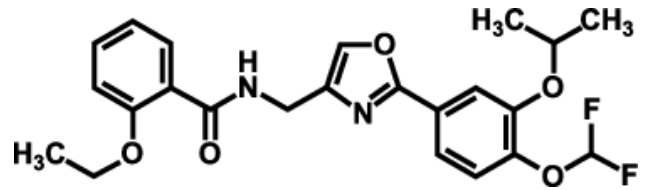
また、薬物の強度が比較的しっかりと示されているものは、ステロイド外用剤であることも説明しました。先の薬事審議委員会で仮採用薬品となったモイゼルト軟膏1%（大塚瀬薬株）は軽症から中等症のアトピー性皮膚炎に用いる治療薬ですが、モイゼルト軟膏の治療の予後によりステロイド外用剤を用いられることがあります。図1に当院で院内に採用されているステロイド外用剤をお示しました。当院におきましても、かぶれ・虫刺され等の軽度なことから、広範囲に及ぶ湿疹等まで使用できる lineup となっております。

ランク（作用強度）	成分名	当院採用薬品
strongest（ストロングスト） 最も強い	クロベタゾールプロピオン酸 エステル	クロベタゾールプロピオン酸軟膏 0.05% 「タイヨ-」・ローション 0.05% 「MKY」
very strong（ベリ-ストロング） とても強い	酪酸プロピオン酸ベタメタゾン ベタメタゾンジプロピオン酸エステル 酪酸プロピオン酸ヒドロコルチゾン	サレックス軟膏・クリーム 0.05%、 デルモゾール DP 軟膏 0.064% パNDERL軟膏・ローション
strong（ストロング） 強い	ベタメタゾン吉草酸エステル	吉草酸ベタメタゾン軟膏 0.12% 「イキ」 デルモゾール G 軟膏・クリーム
medium（ミディアム） 普通	クロベタゾン酪酸エステル	クロベタゾン酪酸エステル 軟膏 0.05% 「タイコ」
weak（ウィーク） 弱い	プレドニゾン	当院該当薬剤なし

図1. 未来の風せいわ病院で院内に採用されているステロイド外用剤

ホスホジエステラーゼという酵素に関して

前述しました、先の薬事審議委員会で仮採用薬品となったモイゼルト軟膏は、新しい作用機序のアトピー性皮膚炎治療薬です。その作用機序とはホスホジエステラーゼ4 (PDE4) という酵素を阻害することにより炎症を抑えるといった具合です。



モイゼルト軟膏の有効成分であるジファミラスト

細胞のいろいろな信号を調節する PDE という酵素は実は 11 種類もあり、体の様々なところで活躍しているとても重要な役割をしております。

11 種類の内、PDE1～PDE6 はその阻害薬が多数実用化されており、薬物療法の貢献度が非常に高いものです。特に汎用されているものは、循環器治療に PDE3 阻害剤が用いられています。血液をサラサラにするシロスタゾールが有名です。

また、PDE4 阻害剤として考えられているのは、気管支炎治療に用いられているのは、カフェインやテオフィリンといったキサンチン化合物です。さらに PDE5 阻害剤は。シルデナフィルクエン酸塩が勃起不全治療剤として 1999 年から使用されております。

その他のサブタイプは実験段階であったり、臨床試験前であったりしますが、PDE1 や PDE2 は脳内の線条体などでドパミン受容体と共存していることから、統合失調症や認知症の改善作用に関連が注目高まっておりますし、今後 PDE と病態との関連がますます注目されることが示唆されております。

★編集後記

新型コロナウイルス感染症の流行が収まらない中、先日飲み薬が緊急承認されました。抗 SARS-CoV-2 剤「ゾコーバ®錠 125mg」(一般名：エンシトレルビル フマル酸錠) です。治療の決め手となしますでしょうか。

誰が罹ってもおかしくない状況ですが、罹らないにこしたことはないです。今一度感染予防を見直し、気を付けてまいりましょう。インフルエンザ感染にも要注意です。

